

生命健康科学部学生の自己教育力

－第二報 入学後1年間の自己教育力－

The Second Report

One Year Longitudinal Study on Self-Directed Learning in Chubu University

－Life and Health Sciences Students at The First Year－

牧野 典子 中山奈津紀 堀井 直子
堀 文子 山田 聡子 井口 弘子
渡邊 実香 上田ゆみ子 足立はるゑ

Tsuneko MAKINO Natsuki NAKAYAMA Naoko HORII
Fumiko HORI Satoko YAMADA Hiroko IGUCHI
Mika WATANABE Yumiko UEDA Harue ADACHI

要 旨

われわれは、自己教育力育成に向けた教育方法の改善を目的に、生命健康科学部の平成18年度入学生を対象にした自己教育力とその関連要因に関する質問紙調査を行い、入学直後から1年間の変化を分析した。その結果、以下の特徴が明らかになった。

1. 自己教育力の総得点は、入学時、春学期終了後、秋学期終了後の調査で漸次低下し、秋学期終了後は入学時より有意に低下していた。
2. 自己教育力の側面Ⅰ「成長・発展への志向」は入学時、春学期終了後、秋学期終了後のすべての間で有意に低下した。
3. 側面Ⅱ「自己の対象化と統制」、側面Ⅲ「学習の技能と基盤」、側面Ⅳ「自信・プライド・安定性」は、変化がなかった。
4. 自己教育力平均総得点と自己効力感および自尊感情、側面Ⅳと自己効力感および自尊感情との間には正の相関があった。

今後も縦断的に自己教育力、自己効力感、自尊感情、学習状況を調査して、教育との関連性を総合的に検討する必要がある。

キーワード：自己教育力，大学生，自己効力感，自尊感情

I. はじめに

本研究の対象である学生は、病気予防や健康増進の専門家としてあるいは看護専門職として総合的・専門的に学び、卒業後も社会の変化に対応できる有能な人材として成長することを期待されている。このことは、生涯にわたる人間形成の基礎

を培う為に必要な主体的に学ぶ意思、態度、能力である自己教育力¹⁾の育成が必要であることを意味していると考えられる。

われわれは、平成17年度から自己教育力育成を促す教育方法の提案をめざし、自己教育力に関連する要因を文献検討により明らかにした²⁾。関連する要因として、自己効力感、自尊感情、臨地実

習、演習、年齢、学科、同居の有無などが検討されている。しかしながら、これらの調査は横断的な調査が多く、入学後から卒業までの期間において縦断的に検討したものは見当たらない。自己教育力の経年的な変化や関連要因の強さを明らかにすることは、学生を長期的な視点からとらえることを可能にし、効果的な教授＝学習活動の実践にとって有益な資料が得られると考える。

そこで、平成18年度から本学部学生を対象とした調査を開始し、入学から1年間の自己教育力の変化と関連要因との関係について検討した。第一報では、初回調査である入学時の結果から学科の特徴を明らかにし報告した³⁾。本稿では、入学時、春学期終了後、秋学期終了後の調査結果から自己教育力の各時期の特徴について報告する。

II. 研究方法

1. 対象：平成18年度生命健康科学部入学生140名（保健看護学科80名、生命医科学科60名）。

2. 調査時期：入学時調査は平成18年4月、春学期終了後の調査（春）は平成18年9月、秋学期終了後の調査（秋）は平成19年3月に実施した。

3. 調査方法：入学時、春、秋に自記式調査票を配布し集合調査を実施した。

4. 調査票の内容

調査票は、自己教育力の育成状態を計る自己教育力尺度と、関連要因の自己効力感、自尊感情、自己学習時間、情報システム利用頻度、対象の属性として年齢、性別、所属する学科・学年、入試形態、同居の有無で構成されている。

1) 自己教育力：西村ら⁴⁾が、梶田⁵⁾の自己教育性尺度に10項目を追加して信頼性と妥当性を検証した自己教育力尺度40項目を用いた。この尺度は4側面により構成されており、第1の側面は「将来、他の人から尊敬される人間になりたい」、「これから専門的な資格や学位などを取りたい」など10項目から成る「成長・発展への志向（側面Ⅰ）」である。第2の側面は「自分のよくないところを自分で考え直すよう、いつも心がけている」、「自分の良いところと悪いところがよくわかっている」など10項目の「自己の対象化と統制（側面Ⅱ）」、第3の側面は「自分の調べたいことがある時に図書館（室）を利用している」、「自分に必要な文献や記録を分類・整理しておく習慣がある」

など10項目の「学習の技能と基盤（側面Ⅲ）」、第4の側面は「自分のやることに自信を持っている方だと思う」、「自分にもいろいろとりえがあると思う」など10項目の「自信・プライド・安定性（側面Ⅳ）」である。合計40項目の質問に対し、「あてはまる 5」、「ややあてはまる 4」、「どちらともいえない 3」、「ややあてはまらない 2」、「あてはまらない 1」の5件法で回答を求めた。

2) 自己効力感：坂野と東條⁶⁾が信頼性と妥当性を検証した一般性セルフ・エフィカシー尺度（GSES）16項目を用い、「はい 1」、「いいえ 2」の2件法で回答を求めた。

3) 自尊感情：Rosenberg, Mが作成した自尊感情測定尺度の邦訳版⁷⁾（SE）10項目を用い、「あてはまる 5」、「ややあてはまる 4」、「どちらともいえない 3」、「ややあてはまらない 2」、「あてはまらない 1」の5件法で回答を求めた。

4) 各学期の学習状況：春と秋の調査票に、以下の項目を追加した。①自己学習に要した1日平均時間、②各学期の「よく勉強したと思う科目」の有無、科目名、「自分にとって有益だった科目」の有無、科目名、③インターネットおよび図書館の月平均利用回数、④大学内ネット利用回数、学科内視聴覚システムの利用回数。「ある 1」、「なし 0」の2件法と記述式で回答を求めた。

5. 分析

自己教育力、GSES、SEは、得点が高い程自己教育力、自己効力感、自尊感情が高くなるように加算し、逆転項目は回答の数字を逆転して数量化した。分析はSPSS.Vr.15.0を用い、自己教育力尺度の信頼係数を算出し、自己教育力の総得点と各側面の合計得点、GSES、SE合計得点の平均と中央値を求め、入学時、春、秋で比較した。得点の差はMann-WhitneyのU検定を行い5%水準で有意（ $p<0.05$ ）とした。また、自己教育力とGSES、SEとの相関関係はSpearmanの ρ 検定を行い1%水準で有意（ $p<0.01$ ）とした。

6. 倫理的配慮

研究代表者が研究目的、調査内容、倫理的配慮（成績・評価と無関係であること、回答拒否や途中の棄権が自由であること、分析は全体集計を行うため個人が特定されないこと）について口頭で説明し、明記した書面を調査票と共に配布して協

力を依頼した。回答は無記名、自記式とし、記入後、回収箱に自分で投函する方法をとった。調査への参加の承諾は、調査票の投函によって同意が得られたものと判断した。また、学生の調査協力が自由意志で行われるように、研究グループメンバーは趣旨説明と書面および調査票の配布のみを行い、回収にはメンバー以外の者が立ち会うようにした。尚、調査実施前に本学の倫理審査委員会の承認を得た（承認番号18002）。

Ⅲ. 結果

自己教育力尺度の回答率が95%以上、自己効力感尺度と自尊感情尺度は90%以上の調査票を有効とした結果、有効回答は、入学時が136名（有効回答率98.6%）、春134名（有効回答率97.1%）、秋123名（有効回答率96.1%）であった。

1. 対象者の属性

平均年齢は入学時18.2歳で高校卒業後すぐに入学した者が多数であった。その他、所属する学科人数、性別、入試形態、同居について各調査時期での差はなかった（表1）。

2. 自己教育力

表1 対象者の属性

		入学時 n=136	1年春学期終了後 n=134	1年秋学期終了後 n=123
平均年齢±標準偏差		18.2±0.8	18.7±1.1	19.2±1.0
学科	保健看護	78 (57.4)	80 (59.7)	73 (59.3)
	生命医科	58 (42.6)	54 (40.3)	50 (40.7)
性別	女性	88 (64.7)	90 (67.7)	81 (66.9)
	男性	48 (35.3)	43 (32.3)	40 (33.1)
入試形態	一般	71 (52.2)	65 (49.2)	59 (48.0)
	推薦	65 (47.8)	67 (50.8)	64 (52.0)
同居	入学前	133 (97.8)	132 (99.2)	119 (96.7)
	現在	118 (86.8)	116 (87.2)	108 (87.8)

自己教育力尺度の信頼性を示す α 係数は、入学時0.85、春0.84、秋0.79であり、すべての時期において確保されていた。

(1) 自己教育力総得点

自己教育力平均総得点は、入学時132.1±16.1、春131.2±16.1、秋128.5±14.5と徐々に低下し、秋の中央値129.0が入学時133.5と比べて有意に低下していた（図1）。

(2) 自己教育力における4側面の合計得点

4側面の各合計得点のうち、最も高い得点は入学時における自己教育力の側面Iで中央値39.0、次が春の側面I 38.0であった。各側面の順位は、

入学時と春は同じく $I > II > III > IV$ の順に高かった。一方、秋は側面II 34.0、側面I 33.0、側面III 32.0、側面IV 30.0で、 $II > I > III > IV$ の順であった（図2）。

①側面I「成長・発展への志向」

側面Iの合計得点は、入学時の中央値39.0、春38.0、秋33.0で、入学時に比べて春は有意に低下し、さらに春に比べ秋は有意に低下した。各質問項目のうち、入学時より春に有意に下がった項目は「自分でなければやれないことをやってみいたい5.0→4.0」であった。入学時より秋に有意に下がった項目は「自分の能力を最大限のばすよう、いろいろ努力したい5.0→3.0」、「たとえ認められなくても、目標に向かって努力したい4.0→1.0」、「自分でなければやれないことをやってみいたい5.0→4.0」、「これから専門的な資格や学位などを取りたい5.0→4.0」であった（図2）。

②側面II「自己の対象化と統制」

側面IIの合計得点は、入学時と春の中央値33.0、秋34.0で、有意差はなかったが秋に増加傾向だった。各質問項目のうち、入学時より秋に有意に上がった項目は「自分の考えや行動が批判されても腹を立てない3.0→4.0」、「疲れているときには何

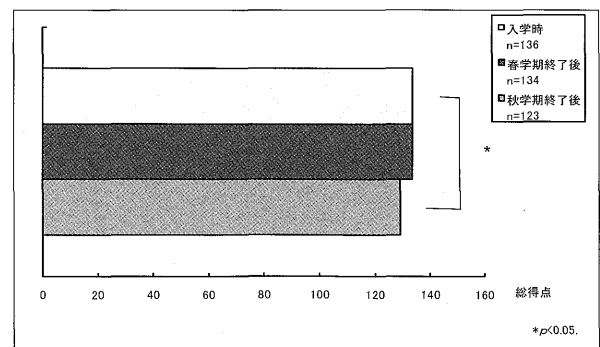


図1 生命健康科学部学生の自己教育力総得点 学期別比較

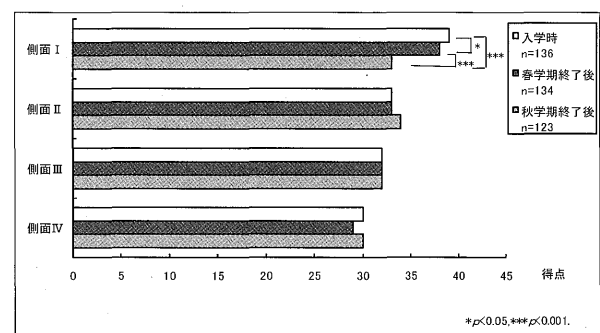


図2 生命健康科学部学生の自己教育力側面別合計得点 学期別比較

もしたくない（逆転項目）4.0→2.0、「テレビを見てしまって勉強がやれないことが多い（逆転項目）4.0→3.0であった。一方、下がった項目は「自分のよくないところを自分で考え直すようにいつも心がけている4.0→2.0」、「他の人から欠点を指摘されると自分でも考えてみようとする4.0→3.0」、「ちょっといやなことがあると、すぐに不機嫌になる（逆転項目）3.0→4.0」であった（図2）。

③側面Ⅲ「学習の技能と基盤」

側面Ⅲの合計得点は入学時、春、秋の中央値が32.0で、変化がなかった。各質問項目のうち、入学時に比べ秋に有意に上がった項目は「自分の調べたいことがある時に図書館（室）を利用している3.0→4.0」、「他の人の話を聞いたり本を読む時内容をふり返りまとめてみる習慣がある3.0→4.0」、「考えていることを筋道立てて書いたり、伝えたりできる3.0→5.0」、「たとえ話などをもちいて人にわかりやすく、説明するのがにがてである（逆転項目）4.0→3.0」、「わからないことがあると、すぐに人に聞く傾向がある（逆転項目）4.0→3.0」であった（図2）。

④側面Ⅳ「自信・プライド・安定性」

側面Ⅳの合計得点は入学時と秋の中央値30.0、春29.0で、有意差はないが春に低下し秋に回復傾向だった。各質問項目のうち、春に比べ秋に有意に上がった項目は「今のままの自分ではいけない、と思うことがある（逆転項目）4.5→3.0」、「今の自分に満足している2.0→3.0」、「自分のことを、はずかしいと思うことがある（逆転項目）4.0→3.0」であった（図2）。

3. 自己効力感

GSESの合計得点は入学時の中央値が6.0、春が5.5、秋が5.0で、有意差はなかったが減少傾向だった（図3）。また、GSESと自己教育力平均総得点の相関係数は0.633、GSESと側面Ⅳの相関係数は0.630と、相関関係がみられた（ $p < 0.001$ ）（表2）。

4. 自尊感情

SEの合計得点は入学時の中央値が31.0、春と秋が30.0で、春と秋に低下した（図4）。また、SEと自己教育力平均総得点の相関係数は0.555、SEと側面Ⅳの相関係数は0.732と、相関関係が見られた（ $p < 0.001$ ）（表2）。

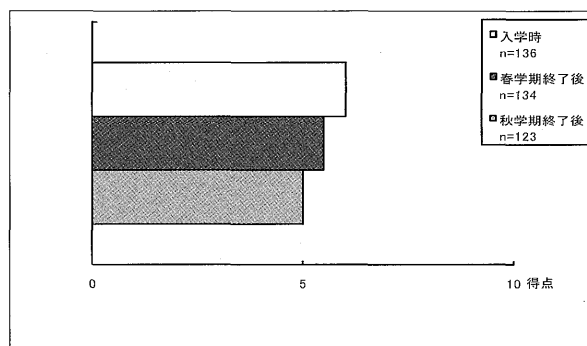


図3 生命健康科学部学生の自己効力感合計得点学期別比較

表2 自己教育力総得点と自己効力感、自尊感情との相関係数

	自己教育力総得点	側面Ⅰ	側面Ⅱ	側面Ⅲ	側面Ⅳ
自己効力感	0.633***	0.395***	0.358***	0.435***	0.630***
自尊感情	0.555***	0.217***	0.265***	0.356***	0.732***

*** $p < 0.001$

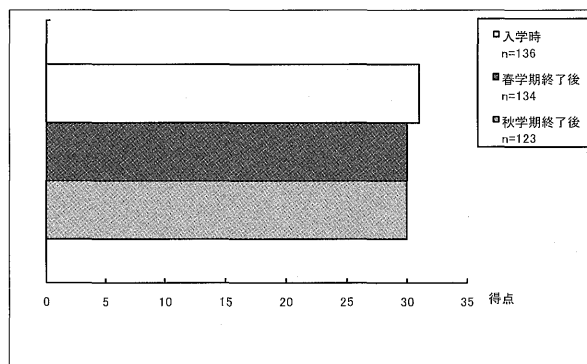


図4 生命健康科学部学生の自尊感情合計得点学期別比較

5. 春学期と秋学期の学習状況

(1) 1日平均の自己学習時間

自己学習時間は、春が最小0分から最大300分で1日平均が63.2±58.3分、秋が最小0分から最大180分で平均52.5±41.3分であった。有意な差は見られないが秋に減少していた。

(2) 情報システムの利用状況

インターネットでの情報検索は、春が月平均14.8±9.3日、秋が月平均14.7±10.0日であり秋が減少傾向であった。

Tora-Net Web mailの利用は、春の月平均11.0±7.7日が秋には月平均8.4±6.8日に減少していた。

Tora-Net ライブラリーは、春が月平均8.4±6.7日、秋が月平均7.4±7.1日であり秋が減少して

いた。

学科内視聴覚教材ビジュラーンの利用は、春が月平均 0.9 ± 2.7 日、秋が月平均 0.9 ± 2.6 日と非常に利用者が少なかった。

図書館の利用は、春が月平均 1.6 ± 3.1 日、秋が月平均 1.9 ± 3.7 日であり、秋の利用頻度が高くなっていた。

(3) よく勉強したと思う科目

「あり」と回答した者が春84名 (63.6%)、秋60名 (51.3%) であり、秋に減少した。よく勉強した理由は「課題のため」35名 (37.6%)、「興味深かった」30名 (32.3%)、「テストがあったから」10名 (10.8%) であった (表3)。

春によく勉強した科目は、生化学、解剖組織学、統計の手法であり、秋は微生物学、基礎看護援助論、基本看護技術論であった。また、学科別にみると保健看護学科は前述と同様であるが、生命医科学科は春に社会福祉学、秋に病理学と生化学を含んでいた。

(4) 自分にとって有益だった科目

「あり」と回答した者が春104名 (78.8%)、秋86名 (76.8%) であり、秋に減少した (表3)。有益科目の上位は、春が解剖組織学、看護学概論、ふれあい実習であり、秋が基礎看護援助論、基本看護技術論、微生物学であった。学科別にみると保健看護学科は学部と同様であるが、生命医科学科は生化学、医科学入門、病理学であった。

表3 よく勉強した、有益だった科目

		(%)	
		あり	なし
よく勉強したと思う科目	春学期終了後 n=134	84 (62.7)	50 (37.3)
	秋学期終了後 n=117	60 (51.3)	57 (48.7)
有益だった科目	春学期終了後 n=132	104 (78.8)	28 (21.2)
	秋学期終了後 n=112	86 (76.8)	26 (23.2)

IV. 考察

1. 自己教育力の変化について

本学部学生を対象とした自己教育力の調査では、秋の自己教育力が入学時より有意に低いという結果であった。各側面の結果では、側面Ⅰ「成長・発展への志向」が、春と秋の自己教育力が入学時より有意に低下していた。側面Ⅰの質問項目では「自分の能力を最大限に伸ばすよう、いろいろな努力したい」、「たとえ認められなくても、目標に向かって努力したい」、「自分でなければやれないこ

とをやってみたい」が有意に低くなっていた。これらからは目標を見失い主体性を欠いてしまった学生の姿を推察することができる。一般的に、大学生の入学時の目標は、将来を展望した長期目標がなく、現実離れした目標の上に構築されていることが多い。大学に入学することが目標になっている場合もある。

先行研究^{8)~13)}では、入学1年後や実習後に側面Ⅰが低下すること、2年次、3年次、演習終了後に高くなることが報告されている。本学部学生の自己教育力が、入学1年後の秋に低下した背景については、教育との関連性を総合的に検討する必要がある。また、側面Ⅰの自己教育力が回復する時期や関連要因を明らかにするために、今後も継続して自己教育力についての調査を実施していく必要がある。

各側面のうち、側面Ⅱ、側面Ⅲ、側面Ⅳの合計得点は変化することなく入学時を維持している。ただ、側面Ⅲの「自分の調べたいことがある時に図書館を利用している」が有意に高くなっていることに関連して、図書館の利用頻度が秋に増加していること、よく勉強した理由の約70%が「課題」と「興味・関心」である。このことから、課題を出すことによって図書館の利用を促すことは、自己学習の方法を習得する機会になり、自己教育力能力の育成につながっていくのではないかと考える。

2. 自己教育力と関連要因との関連

自己教育力と側面Ⅳは、GSES、SEとかなり強い相関関係を示していた。梶田^{5),14)}は、側面Ⅳを他の3側面を決定する心理的基盤として位置づけ、SEと強く関係していると述べている。このことから、自己効力感や自尊感情は、主体的に目標を設定し自己を生涯にわたって教育し続ける自己教育を可能にする心理的土台として、教育方法の重要な要素であると考えられる。したがって、側面Ⅰの回復には、青年期の学生によくある心の不安定さを早期に発見し、内的安定性を確保できるように支援することが自己教育力の育成に向けた効果的な働きかけになることが示唆された。

V. 結論

本研究において、自己教育力の入学時から1年間の調査を行った結果、明らかになった特徴は、

以下のとおりであった。

1. 自己教育力の総得点は、入学時、春学期終了後、秋学期終了後の調査で漸次低下し、秋学期終了後は入学時より有意に低下していた。
2. 自己教育力の側面Ⅰ「成長・発展への志向」は入学時、春学期終了後、秋学期終了後のすべての間で有意に低下した。
3. 側面Ⅱ「自己の対象化と統制」、側面Ⅲ「学習の技能と基盤」、側面Ⅳ「自信・プライド・安定性」は変化がなかった。
4. 自己教育力平均総得点と自己効力感および自尊感情、側面Ⅳと自己効力感および自尊感情との間に正の相関があった。

Ⅵ. おわりに

本研究では、入学時から調査した自己教育力が入学後に低くなることが明らかになり、自尊感情や自己効力感を高めることによって、自己教育力が高まる可能性が示唆された。今後は、どのような教育的アプローチが有効であるかを検討し、検証していくことが課題である。例えば、教育活動を通して、発表や表現の場を多く設定することにより、自分を確かめながら、自己肯定感や自尊感情を高めることも可能性として考えられる。更に研究の方向性としては、今後も縦断的に自己教育力、自己効力感、自尊感情、学習状況を調査して、教育との関連性を総合的に検討する必要がある。

謝辞

本調査にあたり、快くご協力いただいた本学生命健康科学部生命医科学科と保健看護学科の学生および教員の皆様に心よりお礼を申し上げます。

尚、この研究は平成18・19年度中部大学生命健康科学研究所研究助成を受けて行った研究成果の一部である。

引用・参考文献

- 1) 文部省編：「自己教育力」の育成などの視点を提起－中教審教育内容等小委員会が審議経過を報告－，文部時報，26-43，1983.
- 2) 堀文子，牧野典子，渡邊実香他：看護大学生の自己教育力育成に関する研究－第一報 学生の自己教育力に関する研究の動向－，中部大学生命健康科学研究所紀要，7-19，2006.
- 3) 堀文子，牧野典子，山田聡子他：生命健康科学部学生の自己教育力－第一報 入学時における自己教育力の実態－，中部大学生命健康科学研究所紀要，13-19，2007.
- 4) 西村千代子，奥野茂代，小林洋子他：看護婦の自己教育力，日本赤十字社幹部看護婦研修所紀要第11号，9-39，1995.
- 5) 梶田毅一：自己教育への教育，36-53，明治図書，1992.
- 6) 坂野雄二，東條光彦：セルフ・エフィカシー尺度，上里一郎監修：心理アセスメントハンドブック，西村書店，478-489，1993.
- 7) 山本真理子，松井豊，山成由紀子：認知された自己の諸側面の構造，教育心理学研究，30，64-68，1982.
- 8) 岩永秀子，山本昇：看護学生の自己教育力におよぼす看護婦イメージの影響，日本看護学教育学会誌，7(3)，17-28，1997.
- 9) 多久島寛孝，永田華千代，北野正文他：医療系大学在学中の学生の自己教育力の推移，保健科学研究誌，No.2，95-108，2005.
- 10) 南修子，園田麻利子，七川正一他：成人看護学実習における学生の自己教育力に影響する要因の検討，鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要，10，26-37，2006.
- 11) 坪田和美：看護基礎教育における自己教育力，看護教育，44(3)，242-244，2003.
- 12) 新實由香理：看護学実習における自己教育力と授業過程評価の変化およびその関係，長野県看護大学紀要，6，61-71，2004.
- 13) 高橋江美子，小越佐知子：学生の自己教育力の傾向－ペーパーシミュレーションとシミュレーター法による学内演習前後の比較－，第31回看護教育，45-47，2000.
- 14) 梶田毅一：自己意識の心理学，94-97，東京大学出版会，1992.
- 15) 酒井明子：看護学生の自己教育力に関連する要因－Self-esteemの高低に焦点をあてて－，福井医科大学研究雑誌，1(1)，113-128，2000.

著 者

牧野典子 (Tsuneko MAKINO)

中部大学生命健康科学部保健看護学科教授。愛知淑徳大学大学院現代社会研究科現代社会専攻博士後期課程修了。修士（国際教育）。専門分野：成人看護学、急性期看護学、災害看護論。湖西市立総合病院、浜松市立高等学校衛生看護科、静岡県立大学短期大学部、中部大学生命健康科学研究所を経て現職。主な研究テーマは①臨地実習における学生の技術修得過程、②災害看護の教育方法、③看護職のキャリア形成、④手術看護の専門性に関する研究

中山奈津紀 (Natsuki NAKAYAMA)

中部大学生命健康科学部保健看護学科助手。藤田保健衛生大学大学院保健学研究科修士（保健学）。専門分野：成人看護学、クリティカルケア学。名古屋大学医学部付属病院、藤田保健衛生大学病院勤務を経て現職。主な研究テーマは虚血性心疾患患者のQOLに関する研究。

堀井直子 (Naoko HORII)

中部大学生命健康科学部保健看護学科准教授。名古屋大学大学院医学系研究科。修士（看護学）。専門分野：成人看護学（慢性期）。名古屋大学医学部付属病院、大阪大学医学部付属病院にて看護師7年、名古屋市立中央看護専門学校、中部防災看護専門学校にて専任教員21年、中部大学生命健康科学研究所を経て現職。主な研究テーマは、①看護学教育方法、②がん看護に関する研究。

堀 文子 (Fumiko HORI)

中部大学生命健康科学部保健看護学科准教授。名古屋大学医療技術短期大学部看護学科卒業・同専攻科修了、名城大学理工学部卒業。専門分野：基礎看護学。名古屋大学附属病院にて助産師として小児内科、産科病棟に勤務。岐阜医療技術短期大学、中部大学生命健康科学研究所を経て現職。主な研究テーマは、看護・介護労働者の負担軽減に関する研究。

山田聡子 (Satoko YAMADA)

中部大学生命健康科学部保健看護学科講師。東京医科歯科大学大学院医学系研究科。修士（看護学）。専門分野：基礎看護学、看護管理学、看護教育学。藤田保健衛生大学病院、東京済生会中央病院、愛知県立看護大学基礎看護学領域助手、中部大学生命健康科学研究所を経て現職。主な研究テーマは、①臨地実習におけるインフォームドコンセント、②病院看護職者の現任教育、③看護部門の組織構造と機能に関する研究。

井口弘子 (Hiroko IGUCHI)

中部大学生命健康科学部保健看護学科准教授。2001年George Mason University看護学部修士課程修了。Master of Science in Nursing。専門分野：基礎看護学。名古屋大学医学部附属病院、名古屋大学医学部保健学科助手、中部大学生命健康科学研究所を経て現職。主な研究テーマは、①患者情報プライバシーと患者情報の共有に関する研究②異文化背景を持ち日本に在住する人々のQOLに関する研究。

渡邊実香 (Mika WATANABE)

中部大学生命健康科学部保健看護学科講師。名古屋大学大学院医学系研究科。修士（看護学）。専門分野：母性看護学。東京都立築地産院、名古屋大学医学部附属病院にて助産師として勤務。名古屋大学医学部保健学科発達看護学講座、母性看護学・助産学領域助手、中部大学生命健康科学研究所を経て現職。主な研究分野は、不妊看護。特に不妊治療中夫婦の心理的支援に関する研究。

上田ゆみ子 (Yumiko UEDA)

中部大学生命健康科学部保健看護学科助手。名古屋大学医療技術短期大学部。学士（看護）専門分野：基礎看護学。名古屋大学医学部付属病院、小牧市民病院にて看護師として勤務。看護専門学校非常勤講師、中部大学生命健康科学研究所嘱託研究員を経て現職。

足立はるゑ (Harue ADACHI)

中部大学生命健康科学部保健看護学科基礎看護学教授。岐阜大学大学院医学研究科満期修了。博士（医学）。中部大学大学院経営情報学研究科博士前期課程修了。

専門分野：基礎看護学、看護管理学。臨床看護師、看護師長、看護副部長として臨床経験7年。教育歴として中部労災看護専門学校専任教員15年、藤田保健衛生大学衛生看護学科9年を経て、平成18年4月本校に就任。主な研究テーマは①看護職・介護職のストレスマネジメント ②看護師の人材育成に関する研究（新人・中堅） ③臨地実習指導に関する研究。